

26 こんごうりきしぞう 金剛力士像

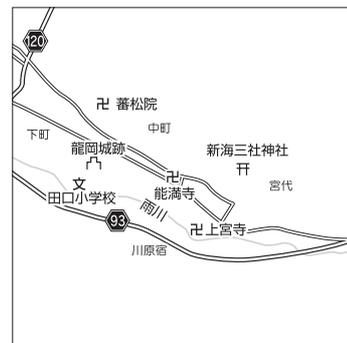


阿形



阿形

指 定 県 宝 平成21年 4 月20日
 所在地 田 口
 所有者 上 宮 寺



この金剛力士像は、新海神社の境内にあった観音堂（本地堂）の仁王門としてあったが、慶応4年（1868）の神仏分離令によって、神宮寺の堂宇とともに現在地に移されたものである。金剛力士は、通常伽藍守護のために山門などの両側に建立されるもので、阿形と吽形の二軀があり、仁王尊とも言われている。この仁王尊も、「ア」と「ン」の万物の始めと終わりをあらわす彫像である。

平成19年（2007）12月の調査で体内墨書銘により、造立が文明2年（1470）であること、仏師が大工祐得、小工伊賀寺雄真であること等が判明した。構造は檜材や松材を使った寄木造りで、軀間部は前後左右で接ぎ、体内は内刳り、頭部は耳の前で割り玉眼を嵌め入れている。

両像とも眉を高く吊り上げ、怒りの眼が鋭い。腰はやや外側に引き、阿形は右手を下げ腰の近くで金剛杵を握っている。左手は横に強く張り屈臂し、肩の上で手のひらを下に向けて開いている。

吽形の右手は阿形の左手同様、横に強く張り屈臂し、右脇で力強く拳を握っている。また左手は下に伸ばし、手のひらを地面に向けて開いている。足は踏み開いて、木の置台上に立っている。堂々とした体軀は量感があり実に見事、怒張のためか、手足には血管の浮き上がりも見られる。顔料布類などの上に胡粉の下地を施し、ベンガラによって彩色したと考えられる。なお、彩色の剥落は甚だしい。

作者は、慶派の流れを汲む地方仏師の作と思われる。全体的に均整がとれ美しく、勢いもあり、格調高い彫像である。